

職員コラム 「きじむんのどうーちゅいむにー」 平成26年度版



琉球大学附属図書館沖縄資料担当の職員が執筆を担当し、毎月更新していたコラム「きじむんのどうーちゅいむにー」の平成26年度版全12回です。

このコラムは、本館2階、情報ラウンジ前にてパネル掲示をし、バックナンバーを図書館ホームページにてPDFで公開しています。

平成26年度のテーマは「琉球大学構内にある史跡や遺物」で、構内に残る史跡・遺物や、史資料にて確認される場所についての話題を提供しました。



首里城正殿跡に建つ琉球大学本館
(1950年代)

第1回 きじむんの どう～ちゅいむに～

～琉球大学開学・首里城の碑・首里の杜～

はいざ～
＆
はいだ～い



今年の「きじむんのどう～ちゅいむに～」は、みんなが知っているようによく知らない琉球大学内外にある史跡や遺物に関するトピックを取りあげ、ディープな歴史・文化を12回連続で紹介します。どうぞお楽しみに！ 第1回目は「首里城の碑」(「SHURI CASTLE」)に関するお話です。

* * 琉球大学開学まで * *

琉球大学は、1950(昭和25)年5月22日、戦火によって壊滅した首里城跡に、「米国民政府令第30号」^{注1)}をうけ、開学しました。首里城跡に琉球大学を設立するまで、大学の候補地は①那覇市天久、②那覇市小祿、③首里城跡の3カ所があがっていたようです。首里城跡地への琉球大学建設は、当時の沖縄民政府文教部長だった山城篤男(やましろ・あつお: 1888~1968)が、米軍政府^{注2)}情報教育部長アーサー・E・ミードやマッカーサー司令部琉球局長ジョン・H・ウェッカーリング准将らにすすめました。建設にかんしては、民政府内でもいろいろな意見が出ていたようですが、結果的には、先祖が築いた政治や歴史、文化のシンボルである首里城跡に建設することが最もふさわしいという山城篤男らの主張が採用されました。

* * 首里城の碑(「SHURI CASTLE」)について * *

琉球大学の建設が決まった首里城跡に1949(昭和24)年1月、建物建築における整地作業がはじまりました。そして大学本館・木造かわらぶき普通教室(8棟)・図書館・コンセット男子寮(12棟)・職員住宅(10棟)…と次々と建造物が仕上がり、「首里城の碑」(「SHURI CASTLE」)が米軍当局により建立されました(1950)。碑は英文で書かれていますが、日本語では次のように訳されています(碑の裏面)。

沖縄戦で跡形もなく破壊された首里城は、1166年から1879年の間、琉球国王の居城であった。琉球王国がその黄金時代を誇った1477年から1526年にかけて、壮麗な建造物が構築された。現在は、琉球大学の本館が、その首里城正殿跡に建っている。

琉大首里キャンパス本館の横にあった碑は、その後首里キャンパス内を転々と移動しますが、琉球大学50周年記念事業の一つとして、2000(平成12)年5月22日「首里の杜」に移されました。



「首里の杜」碑と「首里城の碑」

* * 「首里の杜」の碑について * *

琉球大学は、開学～琉球政府^{注3)}へ移管(1966年7月)～本土復帰に伴い国立大学へ(1972年2月)と変わり、2004(平成16)年4月に国立大学法人化されます。また、首里城復元事業が本格化すると移転を余儀なくされ、現在の「千原キャンバス」「上原キャンバス」に移ってきました。「首里の杜」は開学45周年・移転完了を記念して琉球大学同窓会を中心に造成されたもの(1989: 平成元年)です。「首里の杜」の碑の銘文には、琉球大学が首里城跡に開学した首里時代の思い出を残すため、キャンバス内にあった「開学の鐘」や樹木を移設し、併せて移転完了の記念として造成したと記されています。それで「護国寺の鐘」の複製・「開学の鐘」(米軍使用済みのガスボンベ)なども、「首里の碑」とともに設置されています。

琉球大学の歴史や構内にある史跡・文化についてもっと知りたいと思うかた、沖縄資料室には10年ごとに琉球大学が刊行している記念誌があります。ぜひお読み下さいね！(沖縄資料担当: NK)

注1) 米軍政府が発令した「琉球大学に関する基本法」のこと。

注2) 米国民政府(USCAR)の前身。1946年7月1日～1950年12月5日まで続いた。

注3) 米国民政府の布告第13号「琉球政府の設立」をうけて創立されたが、最終的権限は米国民政府にあった。前身は「沖縄民政府」。

参考文献 沖縄タイムス編『琉大開拓記』(沖縄タイムス/1990)・山里節己『琉大物語 1947-1972』(琉球新報社/2010)

琉球大学開学50周年記念協議会委員会編『国立大学法人琉球大学50年誌』(琉球大学/2010)ほか



さわやかなうりづん^(ヨ)の季節となりました！2回めは「首里の社」「開学の鐘」「複製護国寺の鐘」にまつわる、興味深いエピソードについてリポートします。ではさっそく…Here we go！



「首里の社」碑

琉球大学本部と附属図書館の間に建つ「首里の社」碑。同碑には次の文章が記されています。

本学は、第二次世界大戦の戦火によって荒廃した沖縄の復興と発展に寄与し、新しい民主社会の形成者養成をめざして、1950年5月22日米軍政府によって設立され、以後1966年7月琉球政府に移管、さらに、1972年5月沖縄の本土復帰に伴い国立大学となつた。この「首里の社」は、本学が由緒ある首里城跡に開学し、30年を過ごした首里時代の思い出を残すため、首里キャンパスにあった開学の鐘や樹木等を移設し、1985年5月の移転統合完了を記念して造成されたものである…

「首里の社」碑は、本学と首里（城）とのかかわりや、激動の戦後復興の歴史を記憶にとどめるために設置されました。同碑は1989（平成元）年5月22日（開学記念日）に琉球大学同窓会が寄贈しました。

寄贈した本学同窓会も、1954（昭和29）年12月4日に発足し、今年60周年を迎えるという歴史のある会です。

会の活動については本学HPに「沿革」その他が載っています。ぜひご覧下さいね！

* * 開学の鐘 * *

「開学の鐘」の碑には、次のように記されています。

この「開学の鐘」は、1950年5月22日本学が開学した時、米軍使用済みのガスボンベを吊して時鐘として使用したものである。昭和62年3月竣工

ガスボンベの「開学の鐘」は、平和を象徴する物として保存されました。平和を考える上で、「開学の鐘」が保存されたいきさつき、私たちの記憶にとどめておきたいものです（右の写真が「開学の鐘」です）。



* * 複製護国寺の鐘 * *



ペリー提督が琉球を訪れた1854（咸豐4）年、琉米修好条約が締結します。時の王尚泰はこれを記念し、護国寺の鐘を贈呈しました。その史実をうけ、琉球列島米国民政府は琉米修好条約締結百年を記念し、1960年7月20日、護国寺の鐘の複製品を琉球大学と琉球の人々へ贈りました（ドナルド・P・ブース高等弁務官）。それが琉球大学首里キャンパス内にあった「複製護国寺の鐘」で、千原キャンパス移転の際、メモリアルとして移設されました（左が「複製護国寺の鐘」）。

さて、4月号・5月号では、首里キャンパスから始まる琉球大学開学当初の歴史や、「首里城」の碑・「首里の社」が千原キャンパスにある理由や歴史について、かいつまんでご紹介しました。来月は琉球大学と他大学との関係史についてご紹介します。どうぞお楽しみに!!

（沖縄資料担当：NK）

注1) 旧暦2~3月頃(新暦では3~4月)、または既春の頃のこと。冬の間に乾燥した土に、春の暖かな雨が潤いをもたらす季節の概念。
参考文献 琉球大学開学50周年記念誌編集委員会編『琉球大学50年史写真集』(琉球大学/2000)、琉球大学編『琉球大学十周年記念誌』(琉球大学/1961)、ゴードン・ワーナー『沖縄復帰後語 平和・歴史・占領・返還』(ゴードン・ワーナー/1995)

第3回 きじむんの どう～ちゅいむに～ ～他大学との関係史～

はいさい！うちなーや　ふみちゃん　ちゅーくなてい　いっべー
あちさいびーんやー。まーさる　むん　かでい　くんち　ちきやー
に　ちばてい　いちゃひらやーさい！（沖縄は蒸し暑いですね。あ
いしいもの食べてスタミナつけて頑張っていきましょうね！）

さて、6月のテーマは「琉球大学と他大学との関係史」です！目で見える関係史と目では見えない関係史があります。目で見える関係史の1つ目は、大学本部前に並ぶ植樹の数々です。写真では「ハワイ大学マクレーン学長　二〇〇八年十月十四日来学」という文字が見えます。また、平成13年からラオスでの医学部砂川教授による口腔口蓋裂患者に対する無料巡回診療（手術）の実施などの取り組みが行われていて、ラオスとの繋がりで、ラオス人民民主共和国首相が来学された際の記念植樹も見られます。これは、琉球大学が他国および他国の大学と積極的に交流・連携を行っている証でもあります。特に、ハワイ大学関係の植樹が目立ちます。ハワイ大学との関係がいかに密接かということがこれらの植樹からうかがえます。

2つ目は、<留学生センター>です。当施設は、学内共同教育研究施設として1998（平成10）年に設立され、これまで他大学から多くの留学生を受け入れ、琉球大学から多くの学生を送り出しています（他国→琉大25年283人、琉大→他国24年25人）。平成24年度の資料によると、71の他国の大学と何らかの協定を結んでいます。パラオやサモアなど太平洋島嶼地域の大学との連携の充実ぶりには驚かされます。留学以外にも私たちがセンターと留学生と関わる機会として、毎年7月頃に行われる「留学生祭り」や、チューター制度があります。チューターになるには、センターでの申し込みが必要です。



留学生センター

目で見えない関係史は、琉球大学は設立の際にミシガン大学の支援を受けて開学したという歴史があります。『琉球大学創立二十周年記念誌』（1970）によると、「1951.6月下旬 ミシガン州立大学と指導援助協定を結ぶ。その後、当大学から教授団が来学、大学の指導にあたった」とあります。ミシガン大学以外にも、ウェスタン大学やハワイ大学との交歓会や、招聘教授による講演会などが度々催されたようです。

琉球大学附属図書館では、ハワイ大学の教員であった崎原貢氏の旧蔵資料を所蔵している他、昨年度からハワイ大学マノア校ハミルトン図書館が所蔵する沖縄関係資料「阪巻・宝玲文庫」のデジタル・アーカイブ化事業をハワイ大学との連携ですすめており、今年度中に公開する予定です。

このように、琉球大学と他国との関係は開学以来継続して行われてあり、このような歴史を知ることで、皆さんが普段持っている大学への意識が少し変わってくるのではないかでしょうか。（沖縄資料担当：MS）



大学本部前に並ぶ植樹たち



第4回 きじむんの どう～ちゅいむに～

～千原池周辺の史跡 糸蒲ノ口の墓など～

はいさーい！ きじむんやいびーん。

今月は、琉大千原キャンパスの真ん中にある千原池の周辺史跡を案内するよ！

千原池には、琉球の古い時代のノロの墓が水没しています。津覇の古代マキヨだった糸蒲のノロの墓。琉球がまだ、村単位ではなくて、マキヨと呼ばれる一族単位で生活していた頃の話。

琉大がある場所は、昔は津覇集落（今は中城村津覇）の人たちが住んでいて、その一族には神役の女性がいます。あるとき隣の棚原一門と戦争になり、津覇の一族は千原池附近で全滅。津覇のノロも、ナービグムイという淵（下の写真）で水死。



ナービグムイ

『琉球国由来記』によれば、1713年にはすでに拝所として棚原が拝んでいます。琉大ができるときに墓は千原池に水没し、拝所のみ水面近くに移動しています（右上の写真）。ここは、今でも年に数回、棚原や津覇が拝んでいます。

千原池は、琉大が移転してきた1977年に作った人口池で、農学部農場用の用水ダム。以前は普通の川で、今とはかなり形が違います。ナービグムイのほかにその下流にウフタチグムイという淵もありました。広さ30坪（約99m²）、深さ7尋（約13m）でしたが、今は水没しています。

シージマタヌウカーという井戸もありましたが、今でははっきりとした遺構は確認できません。
琉大附近を流れる川は、ほかに、ムンヌ川ヒオフチュー川があります。

千原池の北側の水面近くには、イルカンダというマメ科の植物（右の写真）が群落を作っていて、開花期の春には、数百もの赤褐色の両国情結ある巨大な花が見事に咲きます。

周辺にはまだまだ琉球王府時代の遺跡があります。

それはまた次回に御案内します！（沖縄資料担当：AS）



シージマタヌ御嶽



イルカンダ

参考文献

西原町史編纂委員会編『西原町史』第四巻資料編三 西原の民俗 平成元年3月

西原町史編纂委員会編『西原町史』第五巻資料編四 西原の考古 平成8年3月

仲間義栄・仲地宗樹・鄭池香「琉球大学千原キャンパスにおける森と人々の暮らしに関するフィールド調査」『琉球大学農学部学術報告49号』平成14年12月

沖縄県宜野湾市教育委員会文化課編集・発行『ぎのわんの地名 内陸部編』平成24年3月

第5回 きじむんの どう~ちゅいむに~

~按司墓・豆腐喰松・千原馬場・果樹園跡~

はいさーい！ きじむんやいびーん。

今回は、農学部付近にある史跡や、農業、農耕儀礼に関する琉大内の史跡を案内します。

按司墓

農学部の敷地内には、イシグスク（西原町指定文化財）があります。そこには、棚原集落の古い墓があります。右の写真は、「先代 大殿内門中按司墓（うふどうんち もんちゅう あじばか）」です。また、津覇高墓という古い墓もあるようですが、今回の取材では確認できませんでした。



按司墓

ト�크ューマーチ（豆腐喰松）

今の北食堂近くには、かつては大人2人で抱えられるほどの大松が2本並んで生えていて、その下に香炉一つあります。村の拝所となっていました。1月2日の山御願（やまうぐわん）の神事の時、この拝所に豆腐を供えると、いつの間にかなくなつたそうです。そのため松が豆腐を食べていると言われるようになりました。

袖山（そまやま）の管理者が守ってきた戦前からの大松でしたが、昭和8年頃、無断で伐採されてしまいました。そのため、大松だけが目印だったこの拝所を探すのが困難になってしまいました。



千原馬場

千原馬場

千原馬場は、年中行事として馬の競走をしていた場所です。北口に入ったあたりのループ道路上、約200mの区間になります。

琉球の競馬は、馬の足4本全てが地面から離れたら失格というルールです。ハレの行事としてどの集落でも人気がありました。村人は晴れ着を着て酒や肴を楽しみつつ見物しました。



果樹園跡

果樹園跡

琉大ができるまで、千原馬場付近は、果樹園が広がっていました。昭和35年ごろ、台湾の陳さん（名は不明）が、千原馬場の南側山地の2万坪の村有地を開墾し、果樹（主に紀州みかん、ポンカン、グワバなど）を植え付けていました。

これらのほかにも琉大内の史跡やスポットはたくさん。続きは、また次回に御案内します！（沖縄資料担当：AS）

参考文献

西原町史編纂委員会編『西原町史』第四巻資料編三 西原の民俗 平成元年3月

西原町史編纂委員会編『西原町史』第五巻資料編四 西原の考古 平成8年3月

仲間鶴栄・仲地赤樹・菊地香「琉球大学千原キャンパスにおける森と人々の暮らしに関するフィールド調査」『琉球大学農学部学術報告49号』平成14年12月

宮野瀬市教育委員会文化課編集・発行『ざわんの地名内陸部編』平成24年3月

取材協力：琉球大学農学部熱帯フィールド科学教育研究センター

平成26年8月1日発行

第6回 きじむんの どう～ちゅいむに～

～琉球大学資料館（風樹館）～

ハイサイ＆ハイタイ、グスーヨーガンジューヤミセーミ（こんにちは、みなさまお元気ですか）？
今月は、千原池のほとりにある、風樹館を紹介しますよ～

金城キクと風樹館

風樹館は、沖縄の農林業の発展に寄与することを目指し、動植物標本や農林業標本・資料を展示・学習する場として1967年首里キャンパスで開館しました。国内大学の「ユニバーシティー・ミュージアム」が少なかった当時、開館は画期的な出来事でした。同館オープンには、金城キクという激動の人生を生きた1人の女性のひたむきな願い、第8代琉球大学学長・高良鉄夫の努力が込められています（敬称は略します）。

高良鉄夫は農学部の研究費などの関係で文教局社会教育課と調整中でしたが、同課の嶺井百合子が金城キクを高良に紹介します。金城は亡き父の記念事業を計画中で、高良と面識を得、本学農学部への農業博物館寄贈を決定。「風樹館」は金城の命名によるもので、「風樹の穂」（『轉詩外伝』九）に由来します。金城キクの名は、風樹館の名とともに深く刻まれることになりました。



（左：金城キク・右：高良鉄夫）
※琉球大学記念誌より



琉球大学資料館（風樹館）の正面玄関写真

金城キク（1909-1966）は、琉球植物の研究家で建材店を開いた父、三郎の急逝により実践女子大学を中退、帰郷します。那覇市で家業を継ぎ才覚を表しますが、戦争により一時廃業。しかし昭和25（1950）年再び建材商「金城キク商会」を設立、昭和36（1961）年には「金城報恩会」を発足させ、事業とともに社会福祉活動を活発に行いました。

風樹館の特色——風樹館から「琉球大学資料館（風樹館）」へ

1983年、琉球大学の千原キャンパス移転に伴い、風樹館も「琉球大学資料館（風樹館）」として新装開館。現在の風樹館は1985年9月オープン、所蔵資料は民俗：約150点、美術工芸：約900点、考古：約2100点、動物：約35000点、地学：約2000点、文献：約1000点の約41000点を数えます。自然系のタイプ標本が300点余、これらの管理・寄託ができる県内で数少ない博物館施設の一つです。設計は沖縄らしい建築にこだわり、海洋博覧会場「沖縄館」を手がけた金城信吉（1934-1984）の作品として有名です。



これから風樹館

今後、風樹館は様々な教育活動を地域に還元し、社会へ貢献できる総合大学博物館として活動を展開していきます。さっそく「琉球大学附属図書館・資料館企画展」を久米島博物館で開催しますよ（開催日程 平成26（2014）年11月2日（日）～11月16日（日））。きじむんの「どう～ちゅいむに～」を読んだあなた、見学お待ちしています。風樹館の活動を応援してくださいね！（沖縄資料担当：NK）

参考文献

外間米子監修『時代を彩った女たち 近代沖縄女性史』（ニライ社/1996）、那覇市総務部女性室編『なは・女のあしあと 那覇女性史（戦後編）』（琉球新報社事業局出版部/2001）、上原信雄編『阿嘉の巻の秘密 平和への誓言』（上原信雄/1983）/琉球大学「五十年史」および「60年史」

平成26年9月1日発行